

# 明治時代の恭明宮

## — 京都国立博物館の調査 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

**恭明宮とは** 恭明宮は、明治初期の神仏分離令により、天皇や皇族の位牌や念持仏など、所持できない品々を保管する施設、また、京都に残った37名の宮中女官の隠居所として造られました。

恭明宮は京都国立博物館の敷地に位置していましたが、関連した研究はほとんど無く、あまり知られていない遺跡でした。ここでは、恭明宮の発掘調査を振り返ってみましょう。

**これまでの調査** 1998年以降、京都国立博物館の平成知新館建設にともなう調査を実施してきました。平安時代後期の法住寺殿（後白河上皇などの院御所）、桃山時代の方広寺（豊臣秀吉の寺院）の遺構を発見しました。また、それらとは方向が少し異なる溝などが見つかりました。明治時代の恭明宮の遺構と考えられましたが、恭明宮と断定するには至らなかったようです。

**今回の調査** 2015年7月、明治古都館の改修工事に先立って、床下・中庭と北西部の調査を始めました。

2002年の調査で発見した南北石垣を頼りに中庭で南北方向の石組溝を発見しました（写真1、溝1）。

溝1（幅0.8m、深さ0.7m）は、護岸に自然石と切石を積み上げたもので、方向は北で東へ約3



写真1 明治古都館中庭で発見した石組溝（溝1、南から）



写真2 明治古都館北西部で発見した溝（溝2、北東から）

度傾きます。溝内には瓦が大量に投棄され、瓦と土器類から明治時代の溝と推定しました。さらに、溝1の西側に築地を想定しました。

翌2016年には、北西側の調査で南北溝（溝2、幅2m、深さ0.5m）を発見しました（写真2）。この溝は2008年調査の溝と同じものです。この溝2と溝1は方位が揃

い、時期も同じことから、関連した施設と考えました。

これまでに発見した遺構を再検討すると、2008年調査の南北溝（溝3、幅1.5m、深さ0.6m）や2009年調査の漆喰井戸（直径約2m）なども、一連の遺構と考えられます。

**恭明宮の歴史** 恭明宮は明治2年（1869）に方広寺跡に計画され、

4年に竣工します。ところが明治6年(1873)3月14日には廃止され、位牌は泉涌寺霊明殿に、仏像・仏具は水薬師寺などに移されます。さらに明治9年(1876)には建物の管理が宮内省から京都府に移管され、建物用材は豊国神社建設や京都府下の小学校などに再利用されます。女官住居棟の一部は盲啞院(元京都市立待賢小学校)に移築されたことが記録に残っています。

**恭明宮の施設** 明治時代の指図などによると、敷地内北側に仏像・位牌が安置された霊牌殿、中央には女官の住居棟が南北方向に2列並びます。南側には遙拝所・警備詰所・馬舎、南辺に表門などがありました。敷地の周りには築地・溝が廻っていました。

**指図との比較調査** そこで改めて、発見した明治時代の遺構と宮内庁・早稲田大学・豊国神社が所蔵する指図とを比べてみました。

遺構や博物館敷地境界線などを基にして合わせると図2のようになります。この図から、中庭で見つかった溝1は恭明宮敷地東限の外郭溝、溝2は敷地東部の南北区画溝、溝3は女官住居棟域の裏側の南北溝に相当します。また、井戸は住居内部の井戸とわかりました。

恭明宮敷地は、北が豊国神社正門付近、東が明治古都館中央付近、南が七条通北辺、西が博物館正門南北塀に相当します(図1)。

**今に残る恭明宮の遺産** これまでの恭明宮の研究によると、明治8年(1875)から始まった豊国神社造営の際、恭明宮第一局が神社に払



図1 2015年の調査区と恭明宮推定地

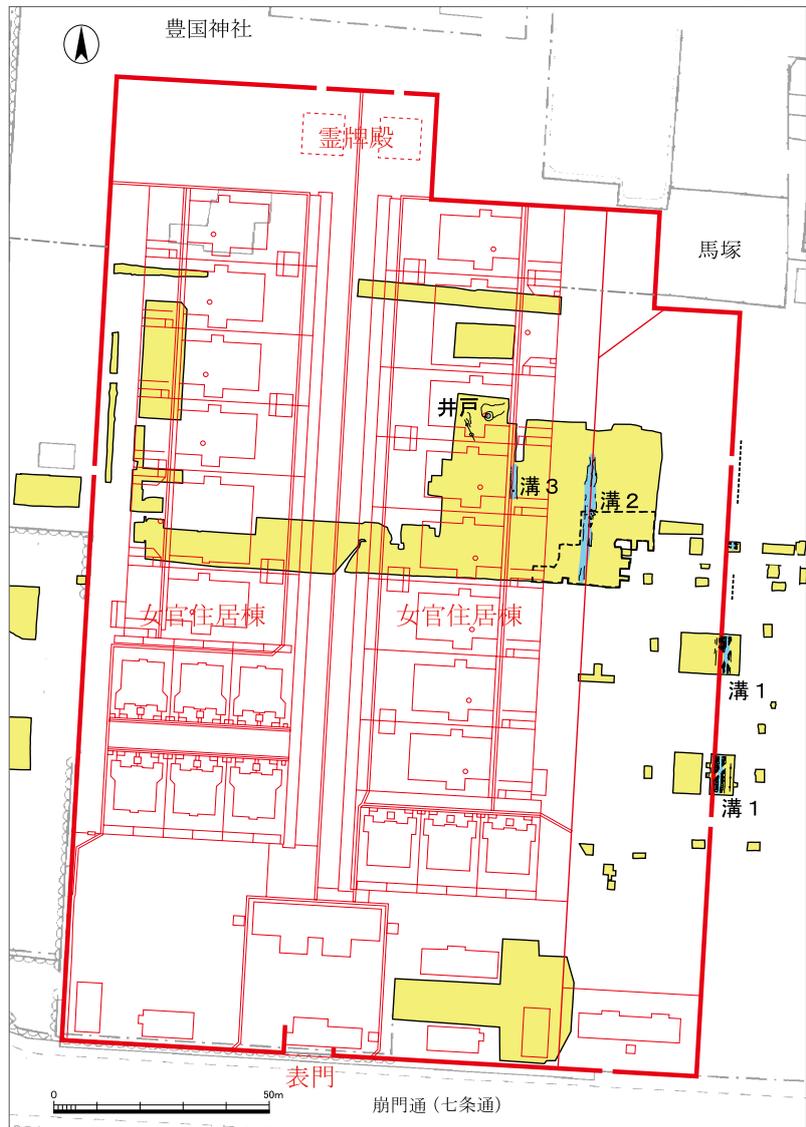


図2 調査区(黄)と恭明宮指図(赤)を重ね合わせたもの  
京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-14 一部改編

い下げられました。現在の社務所は間取りなどから、これに相当すると指摘されています。また、博物館南側の石組溝は、恭明宮南辺

の溝とも言われています。このように、これまで知られていなかった恭明宮の遺構が明らかになりました。(上村和直)